

Peter Ackermann (2017/2018)

Bärndütsch

1. B e r n の価値観は何に由来する？

B e r n 州の領土では1528年以来改革派教会は正教だ。国教会とも言える。

特徴

- 牧師というのは住民に向かって聖書をもとに天主への信仰について語るものだ。牧師は聖書について詳しい人で、聖職者でも神父でもない。
- 住民はGemeindeを形成して、Gemeinde（本当は「市町村」と訳すべきではない）は、改革派教会では、教会で集まって一緒に讃美歌を歌い、年に何回か一緒に聖餐する共同体を指している。共同体の集いや僅かな儀式以外に、原則として、教会という建物はいらぬ。自分の家などでも祈りができるから改革派教会はよく鍵がかかっている。
- 道徳を守った人生を過ごせば天主（キリストを含めて）が自分を救って、さまざまな儀式はいらぬ。かえって尊い命を授けて下さった天主が要求することは、その命やエネルギーを無駄遣いしないで、やるべきことに尽くすことだ。
- 聖書に根拠がない行動を一切許さない。聖書に根拠がないものをすべて迷信とする。
- 聖書に書いてある通り天主を信仰して、なんの仲介者、媒介者はいらぬ。かえって仲介者・媒介者の組織や利害関係やそれに使うお金やエネルギーは損だ。
 - 人間と天主の関係は直接で、教皇制度（ローマ教皇など）や祝祭日、聖職者、聖像画、聖遺物、修道院、ミサ、巡礼、聖地詣で、記念祭の行列、マリア崇拜、聖書に根拠のない聖人崇拜などを許さない。そのため、宗教改革を拒否したローマ・カトリック教会やヴァティカンとの関係を維持する州と激しい対立ができた。
- ↓ Bern 州は日常生活において住民の道徳を、教会を通して、厳しく管理した。そのため、必然的に、B e r n 州のコミュニケーション・パターン、つまり Bärndütsch にも、改革派教会の道徳（生活上の慣習、社会通念）が強く反映されていると言えよう。また、B e r n 州は教会裁判権をもって、住民の行動を監督した。それでなおさら改革派教会の社会観・世界観は住民の間に浸透した。

分離同盟戦争

1848年まで、いまのスイスは「制約同盟」（Eidgenossenschaft）だったと忘れてはい

けない。あくまでも州の同盟にすぎない。スイス連邦成立、つまりスイス連邦憲法の成立ができたのは、1848年だった。そのスイス連邦成立の原則の一つは格カントン（州）に主権が与えられていることだ。だから、それぞれのカントン独自の歴史によって価値観・世界観は異なっている。

スイス連邦成立は、1847年の「分離同盟戦争」の結果だったことを見逃してはならない。生活慣習が改革派教会によって形成されたBern州などは、異なった慣習や社会通念を持つカトリックの州（Luzern, Fribourg, Wallis, Uri, Schwyz, Obwalden, Nidwalden など）と衝突した。近代化にブレーキをかけているように感じられ、カトリックのHabsburg帝国、カトリックのヴァティカン、カトリックのイエズス会など、スイスの外側で強い影響力をもつ組織はスイス連邦の自由と独立にとって危険と見られた。

1847年の戦争は1か月ぐらい続き、100名以上の犠牲者が出た。最終的に進歩側が勝ち、新憲法が成立したが、対立は現在まで完全に消えたと言えない。

近代のBern市民社会

Bernでは、スイス連邦憲法ができて、改革派教会がもたらした「労働と信仰のみ」という禁欲的な市民道徳が支配的になった。昔の特権階級が力をなくして、市民より上に支配階級がなくて、厳しい天主が直接に市民一人一人から要求すると考えられた自主性と責任感、人々の間で誠実さと真面目さを促す。一方では、間違いを許さない禁欲的で厳しい道徳観念はストレスや永続の罪悪感の原因にもなった。そういう意味で一昔前のBernには暗い面もあって、鬱病が多く、自殺や狂暴も頻繁に起こった。

この両面、つまり明るい誠実さと暗い緊張感は今にちまでBärndütschのコミュニケーションの特徴と言えよう。

2. Bern州の多様性

Bern市とBern州の地方の間摩擦は少なくない。まずフランス語圏を見てみよう。

Canton de Vaudがベルンから離れ、1803年にBernから独立を得たが、同じ改革派教会の地域ではあるが、現在でもBernを嫌っている（と言えよう）。かれらは今にちでもいうには、Leurs Excellences de Berne n'ont pas encouragé en aucune sorte un sentiment de patriotisme envers la nation Bernoise dominante（Be

r nの支配者閣下は、支配するB e r n州に対していかなる愛国心を育ててこなかった)。

J u r aでは問題は特に深刻だった。つまり、1814-5年で開かれた、ナポレオン戦争終結後のヨーロッパの秩序再建を目的としたウィーン会議では、カトリック文化圏であるJ u r a北部がB e r nの領土になった。しかし、B e r nは無関係・無関心の態度をとった。様々な摩擦や放火、爆弾攻撃、テロなどの結果、J u r a北部は1979年によりやく独立したカントンになった。

B e r n e r O b e r l a n d (B e r n州のアルプス地方)は、従来のカトリック系宗教を手放したくなかった。独自の伝統や言語を有するO b e r l a n dは、20世紀半ばまで、B e r nに対して強い反感を抱いた。また、B e r nでは、O b e r l a n d人の言葉と態度が理解されず、O b e r l a n dの人がB e r nのことを嫌がって、方言や生活態度の違いで恥ずかしい気持ちでいる人も少なくなかった。

生活が厳しい、雨や災害が多いE m m e n t a lやS c h w a r z e n b u r gなどの山間部の町と村では、都会B e r nで世俗化が進んで、改革派教会の本質が失われていくことを懸念している人が多い。もともとB e r nの国教会の監督を批判していたこの地域では、数多くの「自由教会」が存在している。この「自由教会」は長い間B e r nの政府によって迫害され、現在では、独特の閉ざされた小文化をなしている。この地域では、点々と建てられている農家で生活している住民にとって、よその人とのコミュニケーションが非常に困難と言える。B e r nでは、こういうコミュニケーションが難しい人に出会うこともあるから、それもB ä r n d ü t s c h の特徴の一つだと言えるかもしれない。

最もB e r n市に近いところでは、農村と都市の間の経済的關係が密接で、裕福なB e r nの周りには、同じく裕福な農村があった。その裕福の地域の言葉もB ä r n d ü t s c h に強い影響を与え、丁寧でゆっくりした話し方や行動はB e r n近辺のコミュニケーションの特徴になっている。

最後にM a t t e (ここで「川端」を意味している)という独特の「川端文化」も指摘したい。むかし、そこで商人同士の秘密の言葉もあったが、一般的にはM a t t eの人がB e r n市内と違った語彙を使うことが多かった。私には禁止だったが、個性的な単語が多く、現在では普通のB ä r n d ü t s c h として好まれるようになった。たとえば Modi (Mädchen), Giele (Buben), Tschaaage (Schule), Chemp (Stein), Scheiche (Beine), Ranze (Bauch), Tschugger (Polizist), Leischt (Lehrer), iu (ja) など。

3. 現在の Bärndütsch 話者を理解するには？

改革派教会を政治的・社会的秩序を基盤とした B e r n 国教会は Bärndütsch のコミュニケーションのルールを理解する鍵をなしていると思う。

つまり、

A. 聖書に根拠がないもの、また教会という組織を権威者とすることを否定する。「牧師」の役割は旧約・新約聖書を紹介・説明することだけに過ぎないし、様々な人生相談も牧師の仕事の一部だとみている。B e r n の「聖書のみ」という原理に従い、神秘的な儀式、参拝などは禁止されており、規律と反省だけによる生き方が正しいとされていた。そのため、Bärndütsch はかなりストレート、「飾りのない」、「事実」は事実」というコミュニケーション方である。

ひいては、Bärndütsch の話者がよく懐疑的な態度をとって、なにかが「事実」か「本物」ではないと感じたら、拒絶反応を起こす。やはり、改革派教会の「本物以外は禁止だ」の影響が今でも感じられる。

B. コミュニケーションを滑らかにしたり、雰囲気「気持ちよく」したりすることは非常に下手だ。なぜかというと、「本当」の考え、「本当」の悩みなどしかテーマにできない人が多く、そのような「真面目な会話」が成立する見込みがなければ、黙ってしまう。その特徴は、Bärndütsch を話すテレビ・アナウンサーを聞くとその緊張感と無駄のない話がすぐ分かる。

C. 1960年代になると、「村八分」を覚悟して勇気をだして宗教を否定する Bärndütsch の話者が始まる。その宗教ないし伝統的な道徳の否定は二通りだ。

一つは、意図的に禁止だったものを堂々と公の場ですること。たとえば F a s n a c h t (カーニバル)、あるいは様々な神秘的な儀式を行ったりする。これらの行動には、B e r n の市民の禁欲的秩序に対する強い「抵抗」が感じられる。

もう一つの「宗教・道徳の否定」は、聖書が伝えた倫理を、あくまでも倫理として扱うこと。このような考えを支持する B e r n 教会の牧師たちでさえが多く、従来「聖書の絶対性を信じる」牧師たちとの対立が激しい。しかし、聖書で描かれたキリストをモデルにして、人間の悩みや不安に耳を貸したり、自主的人生ができるように政治や経済界に対する抵抗を進めたりして、宗教のかわり倫理的行動は B e r n では主流になりつつあると思

う。「人間の悩みに耳を貸す」ようなコミュニケーションをするには、B e r n では Bärndütsch しかないと感じ、昔、ドイツ語の標準語しか使えなかったところでは、今は Bärndütsch になっている場合が多い。

歌手 P o l o H o f e r が死ぬ前の言葉は素晴らし Bärndütsch だと思う。昔だったら、死を覚悟した人は、多分、「私の死後は天主が決めます」、あるいは「天主のところに戻ります」と言っていたかもしれない。

しかし、2017年に亡くなった P o l o H o f e r の自筆の訃報は素朴で明るいテキストだった — Tschou zäme, es isch schön gsi! (じゃ、みなさん、楽しかった)。

* * * * *

Bärndütsch の中に見る人々の感情、価値観、道德観念

Mani Matter と Kurt Marti を中心として

Bärndütsch は日常の会話だけに使われている言葉ではありません。ここでは、私の世代に強い影響を与えた二人の Bärndütsch の詩人を紹介したいと思います。Mani Matter (1936-1972) と (私の先生だった) 詩人 Kurt Marti 牧師 (1921-2017) です。Matter と Marti の Bärndütsch は、田舎臭いどころか、都会の生活をテーマとしてベルンの人々の感情、価値観や道德観を非常にうまく反映しています。標準語とは全く違う Bärndütsch の特徴を最もきれいな形で表現した二人は Bärndütsch に大いに貢献しました。

二人はベルンの宗教的・道德的伝統を汲んで、市民はどのような人生観・正義観を持ち、個人の責任による社会や政治体制の中でどのように生きるべきか、を示唆しています。

このような、個人と現代社会にかかわるテーマは、「お堅い」ドイツ語を使うと十分伝わらない可能性が高く、かえって逆効果になってしまいます。「お堅い」ドイツ語どころか、テーマが重大であるからこそ、言葉遣いは面白く、少々滑稽なスタイルでなければ、人々の心に訴えられないと、二人はよく認識しています。

Matter も Marti も Bärndütsch の特徴を生かしながら宗教的・政治的なテーマ、場合によっては非常に悲しいテーマをユーモラスな形で簡潔に市民に訴えた業績は非常に大きいと言えます。「ベルン」という現実の中で、真剣に重要な課題に立ち向かう二人の姿勢は今も広く尊敬されています。

(Mit herzlichem Dank an Frau Nagisa Wälti für Hilfe bei der Uebersetzung und
Durchsicht der Texte)

(以下の歌の直訳にあたって、その意味と内容をどのように日本語に伝えられるか、なんでも相談して下さった Wälti なぎさ様に心から感謝しております。)

I han en Uhr erfunde

私は時計を発明した (直訳)

i han en uhr erfunde
wo geng nach zwone stunde
blybt stah

私は時計を発明したんだ
いつも2時間経つと
止まる時計を

aha
dir gseht vilicht nid y
was ds praktische söll sy
da dra

ふふん
きっと分からないだろうな
これがどんな
代物か

i will nechs säge
es isch vowäge

ならば、教えましょう
そのわけを

geng we myni uhr blybt stah
mahnts mi dra das i se ja
ganz alei erfunde ha
und de dünkts mi i syg glych
nid son e tumme ma
i heig
ja doch en uhr erfunde
wo geng nach zwone stunde
blybt stah

時計が止まると毎回思う
これはほかでもない
私が一人で発明した
だから、私はまんざら
馬鹿な男じゃない
だって私が
時計を発明したんだ
いつも2時間経つと
止まる時計を

geng we myni uhr blybt stah
mahnts mi dra das I se ja
ganz alei erfunde ha
und de dünkts mi i syg glych
no ganz e geschickte ma

時計が止まると毎回思う
これはほかでもない
私がたった一人で発明した
だから、私はかなり
才能のある男だ

fröidig zien i se de wider uf
giben ere für zwo stunde schnuuf
und mir git das für zwo stunde
das verstöht dir sicher guet
sälbschtvertrouen und e früsche muet

毎回ネジを巻く喜び
時計に2時間分の息吹を与えれば
私自身にも
— もうお分かりでしょう —
2時間分の自信と新たな勇気が湧いてくる

denn i
ha doch en uhr erfunde
wo geng nach zwone stunde
blybt stah

zwar si isch nid sehr präzis
und git z'tüe vo früe bis spät
doch das stört mi i ker wys
s'git mer glych das gfüel
vo stolzer majeschtät

i heig
derfür en uhr erfunde
wo geng nach zwone stunde
blybt...

なぜなら私が
時計を発明したんだ
いつも2時間経つと
止まる時計を

あまり正確という訳ではないから
朝から晩まで面倒だけど
そんなこと一向に気にならない
それどころか
誇らしげな威厳を感じるんだ

そんなわけで、私が
時計を発明したんだ
いつも2時間経つと
止ま...

(普通、政治への参加は Verein[社団・会]から始まる。Verein は、「他人」への考慮の基礎を習う場所とされている)

Mir hei e Verein

mir hei e verein i ghöre derzue
und d'lüt säge: lue dä ghört o derzue
und mängisch ghören i würklech derzue
und i sta derzue

und de gsehn i de settig die ghöre derzue
und hei doch mit mir im grund gno nüt z'tue
und anderi won i doch piess derzue
ghöre nid derzue

und ou was si mache die wo derzue
tüe ghöre da standen i nid geng derzue
und mängisch frage mi d'lüt: du lue
ghörsch du da derzue?

und i wirde verläge, sta nümm rächt derzue
und dänken: o blaset mir doch i d'schue
und gibe nume ganz ungärn zue:
ja i ghöre derzue

und de dänken i albe de doch wider: lue
s'ghört dä und diese ja ou no derzue
und de ghören i doch wider gärn derzue
und i sta derzue

我々の会 (直訳)

我々の会、私もその会員
そして人は言う「見ろ、彼も会員だ」
時にはその通り、私は本当に会員だ
(会員であると) 認める

でも、会員だけど
私とは何の関係もない人もいるし
中には会員かなと思っても、実は
会員じゃない人もいる

それに、会員の人がやってること
必ずしも賛成ではない
時々人は私に聞く「おい、君、
君もその会員かい？」

そして、戸惑う。あまり会員でいた
くなくなる
「まあ、どうでもいいか」
あまり良い気はしないが
「ええ、私も会員だ」と認める

そしてまた考え直す「ほら、
この人も、あの人も会員なんだよ」
そうして、やはり会員であることを
誇りに思い
(会員であると) 認める

so ghör i derzue ghöre glych nid derzue
 und stande derzue stande glych nid derzue
 bi mängisch stolz und ha mängisch gnue
 und das ghört derzue

会員でいるか、会員でないか
 (会員であると) 認めるか、認めないか
 誇りに思ったり、うんざりしたり
 それも会員の証

mir he e vereिन i ghöre derzue
 und d'lüt säge: lue dä ghört o derzue
 und mängisch ghören i würklech derzue
 und i sta derzue

我々の会、私もその会員
 そして人は言う「見ろ、彼も会員だ」
 時にはその通り、私は本当に会員だ
 (会員であると) 認める

(Bern の空港は主にアルプスの観光用の空港でしたため、Bern の人々がよく想像できる題材です。現代社会におけるコミュニケーションと責任を強調する歌)

Dr Alpeflug

アルプス観光フライト (直訳)

s'sy zwee fründen im ne sportflugzüg
 en alpeflug ga mache
 flügen ufe zu de gipflen und
 z'dürab de gletscher nache
 hinde sitzt dr passagier
 dä wo stüüret, dä sitzt vor
 und es ratteret und brummet
 um sen ume dr motor

友達二人がセスナに乗って
 アルプスへ観光フライトに出かけた
 あちらの山頂へ上がった
 こちらの氷河へ下がったり
 一人は後ろの乗客席
 操縦する男は前の席
 そして、ガタガタ ゴウゴウ
 そこら中にエンジン音

da rüeft dä, wo hinde sitzt:
 lue, ds bänzin geit us, muesch lande!

すると、後ろの男が
 「見ろ！燃料がないぞ。着陸しないと！」

wie? was seisch? rüeft dr pilot

「何？何を言ってるんだ？（とパイロット席の男）

los, i ha di nid verstande
 wie? was hesch gseit? rüeft dä hinde
 warum landisch nid sofort?
 red doch lüter, rüeft dä vorne

おい、聞こえない！」
 「何？何と言ったんだ？（と後ろの男）
 だから、何ですぐに着陸しないんだ？」
 「もっと大きな声で話してくれ！（と前の男）

bi däm krach ghör i kes wort

こんなにうるさくちゃ、何も聞こえない！」

i versta's nid, rüeft dä hinde
 warum machsch's nid? bisch drgäge?

「聞こえないんだよ（と後ろの男）
 お前はなんで着陸しないんだ？反対なのか？」

i versta's nid, rüeft dä vorne
 muesch mer's würklech lüter säge!

「聞こえないんだよ（と前の男）
 だから、もっと大きな声で話してよ！」

wie? was seisch? rüeft, diese, lue
 dr tank isch läär, du flügsch nümm wyt!

los, bi däm mordstonnersläärme
 rüeft dä vorne, ghör i nüt

aber los doch, rüeft dä hinde
 gottfridstutz mir hei nid d'weli
 tue nid ufgregt, rüeft dä vorne

red doch lüter, gottverteli!

los, rüeft dise, we mir jitz nid lande
 gheie mir i ds tal!
 ghöre gäng no nüt, rüeft äine
 los begryf doch das emal!

so het im motoreläärme
 dr pilot halt nid verstande
 dass ihm jitz ds bänzin chönnt usga
 und dass är sofort sött lande
 da uf ds mal wird's plötzlech still
 nämlech will ds bänzin usgeit
 und jitz wo me's hätt verstande
 hei si beidi nüt meh gseit

「何だと？何言ってるんだ！（と叫び）、
 見ろ、

燃料がないじゃないか。もうそんなに
 飛べないぞ！」

「聞け、このもすごい音で
 (前が叫ぶ) 何も聞こえないんだよ！」

「だから、聞いてくれ！（と後ろの男）
 くっそー、もう時間がないんだ！」

「そんなに興奮するなって！（と前の
 男）

もっと大きな声で言ってくれ、馬鹿野
 郎！」

「おい！（と後ろ）今着陸しないと
 谷底に落ちこちまうぞ！」

「まだ聞こえないんだよ（と相手）
 おい、分かってくれよ！」

そんな具合にエンジン音がうるさくて
 パイロットは分からない
 燃料がいつ切れてもおかしくない
 すぐ着陸すべきだ、と
 すると突然、静寂が訪れる
 そう、燃料がなくなったのだ
 やっと互いが理解できた今、
 二人はもう何も言わなかった

(「自分」は社会の中で、小さなな粒子に過ぎない)

Einisch am'ne morge

einisch am'ne morge
oder am'ne namittag
wärde zwee vo myne bekannte
irgendwo sech traffe
einisch am'ne morge
oder am'ne namittag

und si wärde brichte zäme
über dis und das und äis
und uf ds mal wird eine säge:
bsinnsch du di a matter?
wäretdäm si brichte zäme
über dis und das und äis

und de wird dr ander säge:
meinsch dä, wo so liedli macht?
ja, grad dä. - was isch mit däm? -

dä syg chürzlech gstorbe!
und de wird dr ander vilicht
säge: eh was du nid seisch!

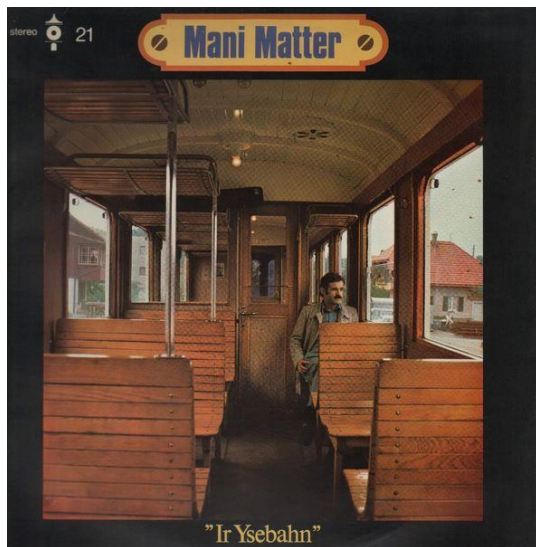
或る日の朝 (直訳)

或る日の朝
または午後かもしれない
二人の知り合いが
どこかで会う
或る日の朝
または午後かも知れない

そして互いの近況を語り合う
こんなこと、そんなこと、あんなこと
すると、ふと一人が
「Matter を覚えているかい？」
互いの近況を語り合う
こんなこと、そんなこと、あんなこと、
その合間

そして、もう一人が
「あの歌を作る人？」
「ああ、その人」「その人がどうした
んだ？」

「こないだ死んだんだ！」
すると、もう一人がたぶん
「へー、そうなんだ」



Ir ysebahn

ir ysebahn sitze die einten eso
 dass si alles was chunnt scho zum vorus gseh cho
 und dr rügge zuechehre dr richtig vo wo
 dr zug chunnt

die andre die sitzen im bank vis-à-vis
 dass si lang no chöi gseh wo dr zug scho isch gsy
 und dr rügge zuechehre dr richtig wohi
 dr zug fahrt

jitz stellet nech vor, jede bhauptet eifach
 so win är's gseht, syg's richtig, und scho hei si krach

si gäben enander mit schirmen uf ds dach
 dr zug fahrt

列車の中で (直訳)

列車の中で、ある人は
 これから来るものを見ようと
 電車が走って来た方向に
 背を向けて座る

ある人は、その向かい
 来た所をずっと見ようと
 電車が走っていく方向に
 背を向けて座る

考えてみてくれ、両者が
 自分の見方が正しいと言った
 ら、すぐ喧嘩になって
 傘で互いをつつき合う
 それでも電車は走る

und o wenn dr kondüktör jitze no chunnt
so geit er däm sachverhalt nid uf e grund
är seit nume, was für nen ortschaft jitze chunnt
s'isch rorschach

そのうえ、車掌は
そんな事情にお構いなし
次の停車駅を言うだけだ
「Rorschach でございます」

(Rorschach war früher Endhaltestelle der meisten Schnellzüge von Bern her)

(Rorschach は当時、ベルンからの多くの急行の終点駅だった)

(「自分」は偉そうな振る舞いをする意味がない)

Ds Portmonee

財布 (直訳)

s'het einisch eine son es fürnähms portmonee ghouft

ある時、男が大層立派な財布を買った

das ihm kes gält meh bliben isch für dry

それで、入れる金がなくなった
だから骨董屋で

hets müessen antiquarisch

現金に換えなきゃならなくて、

ytuusche gäge bar, isch

彼は前より貧しくなった

du ermer weder vorhär dranne gsy

är het jitz wider gält gha aber nümme glych vil

今また金は手にしたが、前の額には及ばない

und ou kes portmonee fürs dryztue meh

それに、それを入れる財布もない

und was ne bsunders gfeckt het

そして何より腹立たしいのは

isch dass's jitz nümme greckt het

今や金が足りないこと

für son es schöns wi dises eis wär gsy

あの財布みたいにきれいなもの
を買うのには

är het sech gseit: henu es tuets es eifachers o

彼は思った「まあ、もうちょっと質素なものにしよう」

und für nes eifachs hets no glängt grad juscht

そして、質素な財布だったら金もある、ギリギリ足りる

är het eis ghouft doch är isch

財布は買ったは良いものの

wils nüt nützt wen es läär isch

中身が空じゃ、何の役にも立たないから

s'du wider ga verchoufe mit verluscht

損を承知で、また売りに行った

jitz het er dänkt: abah, me cha ja ds gält schliesslech o

今度は彼も考えた「もういい、所詮金なんて

ganz eifach in es gabatruckli tue

Gaba の缶カラにいれとける！」

und chouft es truckli gaba

laht d'gaba ds sänklich aba

und dasmal blybt es füzgi no derzue

är tuet das füzgi dry und dänkt: das truckli isch zwar

kes fürnähms portmonee das gwüss nid nei

doch ischs ou süsch ke gwinn halt

so hets doch jitz en inhalt –

und fahrt vergnüegt im tram für ds füzgi hei

そして、Gaba ののど飴を
い

中身をドブに流したが
それでも今度は 50 円残った

彼は 50 円を入れて思う「こ
の小さな缶は

立派な財布なんかじゃない、
間違いない

その上、何の儲けもないけれ
ど、

今は少なくとも中身があ
る！」

そうして、その 50 円で市電
に乗って、満足気到家へ帰っ
て行く

Gaba の のど飴



dr mönch isch wi dä

人間って (直訳)

dr mönch isch wi dä wo dr zug het verpasst und

人は、電車に乗り遅れると

sech d'frag nächär gstellt het: wiso?

後から「どうして？」と自分に聞いたです

und gseht, dass sy uhr äbe hinder isch gange

そして、自分の時計が遅れていることに気づき、

und dänkt: das söll nümme vorcho!

同じことを二度としないように！と考える

und geit sech, für nid no dr nächscht zug z'verpasse

すると、次の電車には乗り遅れないように

e besseri uhr ga erstah

もっと良い時計を買いに行く

und won er drmit uf e bahnhof zrügghunnt

そして、時計を手に駅へ戻ると

isch dr nächscht zug halt ou scho nüm da

もう次の電車もない

das chunnt halt drvo, dänkt er, dass i nid gründlech

すると思当たるのだ。ちやんと

dr fahrplan ha gläse vorhär!

前もって時刻表を見なかったからだと

und list ne du gnau, bis er gseht, dass inzwüsche

そして、時刻表を隅々まで読んでいるうちに

grad wider e zug gfahre wär

次の電車も行ってしまう

jitz blyben i hie uf em perron, so nimmt er

こうなったらホームにいよう。そうすれば

sech vor, de verwütsch'i ne scho

必ずのれると考える

und blybt dert und wartet, da fahrt ihm dr zug

そして、ホームでじっと待っていると、電車は

uf em andere perron drvo

他のホームから出て行って
しまう

so steit er no geng uf em bahnhof desume

そんなわけで、いまだに駅
の周りで

das heisst: wenn er nid gestorben isch

(死なないかぎり)

und während er wartet uf d'züg, won ihm ab sy

乗り損なった電車を持って
いるうちに

geit ihm dr nächscht scho dür d'büsch

次の電車にもいかれてしま
う

Ds Lied vo de Bahnhöf

das isch ds lied
 vo de bahnhöf wo dr zug

 geng scho abfahren isch
 oder no nid isch cho
 und es stöh
 lüt im rägemantel dert

 und tüe warte

 und ds gepäck
 hei sei abgestellt und zwöi chind

 luegen am outomat
 öb nid doch dert no meh
 usechöm
 als die caramel wo si

 scho hei ggässe

 und dr bahn-
 hofvorstand telephoniert
 d'mütze hanget ar wand

 und im wartsaal isch gheizt

 sitzt e ma
 won e stumpe roukt wo stinkt

 und list ds amtsblatt

駅の歌 (直訳)

これは
 電車がいつも行ったば
 かりか
 来そうにもない
 駅の歌
 その駅で人々は
 雨合羽姿でつつ立って、
 電車を
 待っている

 荷物は
 下に置かれたまま そ
 して、子供が二人
 自動販売機を覗きこむ
 まだ何か
 でてきやしないか
 もう食べちゃったキャ
 ラメル
 のほかに

 駅員は
 電話で話し中
 制帽は壁にかかっている
 暖房の聞いた待合室で
 は
 男が一人座って
 臭いたばこを吸いなが
 ら、町内紙を
 読んでいる

mängisch lüt-	時々電車の
tet e gloggen und en ar-	往来を知らせる鐘が鳴
	る
beiter mit schwarze händ	手を真っ黒にした作業
	員が
stellt e weiche me weis	何のためか
nid für was	線路のポイントを
	換える
dänk für d'güeterwäge wo	倉庫の前に止まってる
vor dem schopf stöh	貨物車のためなのか
und dr bahn-	すると駅長
hofvorstand leit d'mützen a	が制帽をかぶり
s'fahrt e schnällzug verby	列車が通過する
und es luftet no gäng	そして、列車の風が
wäretdäm	まだ吹き煽る中
dass der vorstand schon sy huet	駅長がまた制帽
wider abzieht	を脱ぐ
das isch ds lied	これは
vo de bahnhöf wo dr zug	電車がいつも行ったば
	かりか
geng scho abfahren isch	来そうにもない
oder no nid isch cho	駅の歌

MANI MATTER: Karl Tellenbach (Bärndütsch: **Dällebach Kari**) (1877-1931)
(直訳)

<p> こういう男がいました — 小さいときから苦しんでいた、 いつも笑いものにされたため 最初は泣いたり 言い争ったりしたけれど、 無駄だと悟った。それを皆が望んでいるんだと </p>	<p> s'isch einisch eine gsy, dä het vo früech a drunder glitte dass ihn die andre geng usglachet hei am afang hat er grännet het sech mit den andre gstritte s'nützt nüt, das isch ja nume was si wei </p>
<p> ある人は悲しくなる、 他人がからかっているのを見たら。 しかしこの男ほど他人を笑わせるのが好きな人はいなかった </p>	<p> wenn's mänge truurig macht, wo d'lüt sech luschtig drüber mache s'het sälten eine luschtig gmacht wi dä </p>
<p> 「それじゃ」と考えて 私のことを笑うのを面白いと思うなら 笑う理由を与えよう </p>	<p> är het sech gseit: nu guet wenn dir so gärn ab mir tüet lache i will nech jitze grund zum lache gä </p>
<p> そして、やってやった！ もの凄い冗談を、 人々を爆笑させる冗談、 くすぐるような冗談、 刺すような冗談、 人の応えにかならずまた応えた </p>	<p> und är isch häreggangen und het afa witze rysse dass d'lüt sech jitz hei d'büüch vor lache gha het witze gmacht wo chutzele und witze gmacht wo bysse und het ke antwort ohni antwort gla </p>
<p> そしてこの大爆笑、 かれの冗談が招く大爆笑で かれのことを笑おうとはもう誰も考えなくなった それでこの笑っている大勢の人々を 笑っているままにして 彼はみじめに命を絶った </p>	<p> und i däm grosse glächter wo's het ggä ab syne witze isch ihn uszlache keim i sinn meh cho da het er all di lacher i däm glächter inn la sitze und het sech himeltruurig ds läbe gno </p>

Kurt Marti

Wo chiemte mer hi? (Wo kämen wir hin?) 一体どこにたどり着

くのだろう? (直訳)

wo chiemte mer hi	一体どこにたどり着くのだろう
wenn alli seite	だれもが
wo chiemte mer hi	「一体どこにたどり着くのだろう」と言っても
und niemer giengti	誰も行って
für einisch z'luege	確かめようとしなかったら、
wohi dass me chiem	一体どこにたどり着けるのか、
we me gieng	本当に行くのならば

(保守派の人はよく「wo chiemte mer hi? =このことを許すべきではない、このままでどこにたどり着くのか、だからやめなさい!）と怒る。

wo kämen wir hin, wenn alle sagen würden: "Wo kämen wir hin?" und niemand würde gehen, um einmal zu schauen, wohin man käme, wenn man gehen würde

über d'brügge (Ueber die Brücken) 橋の上 (直訳)

z'bärn	in Bern	ベルンには
gits	gibt es	あるんだ
nid nume d'aare	nicht nur die Aare	アーレ川だけじゃなく
und	und	そう
über d'aare	über die Aare	そのアーレ川の上に
brügge	Brücken	橋が
und über d'brügge	und über die Brücken	そしてその橋の上に

lütt	Leute	人が
wo chömen und gönge	die kommen und gehen	行ったり来たり
z'bärn	in Bern	ベルンには
gits	gibt es	いるんだ
lütt	Leute	人が
wo über d'brügge gönge	die über die Brücken gehen	その橋の上を歩き
für nümme meh z'cho	um nie mehr zu kommen	一度も帰って来ない人が

z.b. 25.11.72

例えば 1972年 11月 25日

(直訳)

hütt	heute	今日の
am morge	morgen	朝…
d'mäldig	die Meldung	知らせが…
geschter	gestern	昨日の
am abe	abend	晩…
sygi	sei	だったらしい…
dr mani	der Mani	マニが
dr mani matter	der Mani Matter	マニ・マッターが…
sygi	sei	だったらしい…
tödlech	tödlich	死亡事故に…
usgrächnet är	ausgerechnet er	よりによって彼が

vilicht**たぶん (直訳)**

vilicht
 wenn ig einisch nüt me tät danke
 dankt i de meh

たぶん
 もしいつか何も考えなくなったら
 きっともっと考えるだろう

vilicht
 wenn ig einisch nüt me müesst mache
 miecht i de mängs

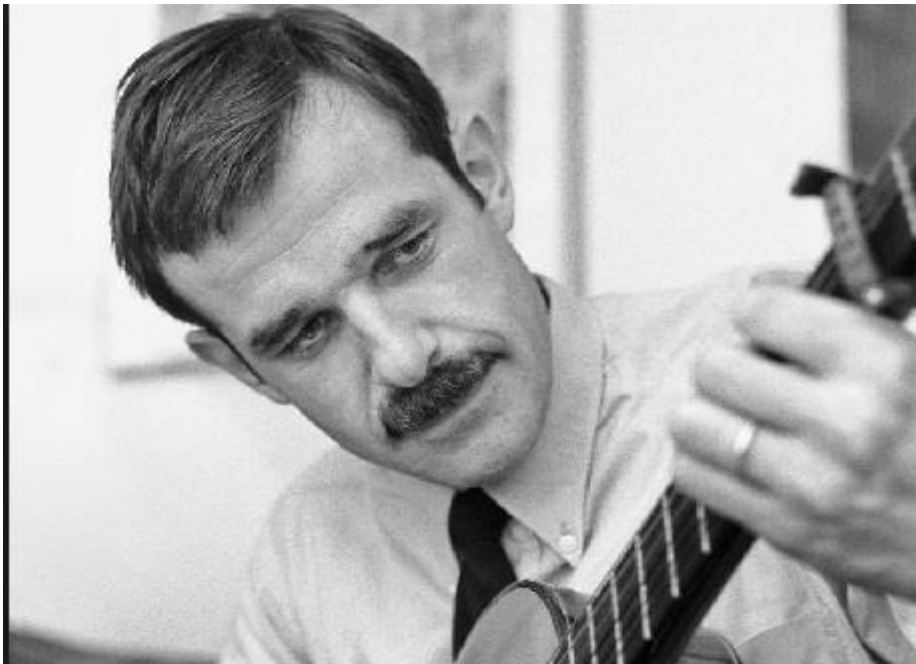
たぶん
 もしいつか何もしなくてよくなったら
 きっともっと色々するだろう

vilicht
 wenn ig einisch nüt me würd säge
 seit i de nöis

たぶん
 もしいつか何もいわなくなったら
 きっと何か新しいことを言うだろう

vilicht
 wenn ig einisch nüt me sött sy
 wär i de öpper

たぶん
 もしいつか何者でもなくなったら
 どこかのだれかになれただろう



Mani Matter

1936-1972

高校生のとき Georges Brassens などの影響を受けてシャンソンを作曲し始める
 1963-1970 Bern 大学の法学部で博士号を取得、助教授として国家基本法・公民権・行政法
 の分野で研究に携わった
 1972 高速道路の事故で死亡

Mani Matter の考えは、直接的には宗教的テーマを取り上げてはいないものの、Bern 州のプロテスタント系の価値観を反映している。個人の生活も社会や政治の成功もすべては自己の努力、誠実さと責任によると考え、「抵抗」、必要に応じては怒りもなければ人間が歩むべき道（道徳）は脅かされる、という認識が強い。

Matter の歌とエッセイから分かるように、「歩むべき道」を抽象的・学術的に説明するのではなく、日常生活のたわいもないことを、日常の言葉（そして勿論 Berndütsch）で語ることで人々の心をつかもうとした。

ところどころ、ノンセンスや誇張することによって人間味や人間の弱点を面白おかしく、愛情豊に歌っている。それは Bern の典型的なユーモアとも言える。

Berndütsch のコミュニケーション・パターンにどれだけの影響を与えてきたか、Mani Matter の歌から読み取れる。

つまり、どの言葉（勿論日本語）にも見られるように、「自分」をどのように表現するかによってコミュニケーションの成功と失敗が決まる。

そこで Mani Matter の「自分」は、常に社会・政治などに対して責任を負い、人間の平等を尊重し、自分の弱みを認識しながらも、なるべく社会に調和をしようとする「自分」である。Matter は、相手に押し付けるような強い自己主張を好まず、自己主張か高望みを好む人間を風刺的に扱い、ユーモアに富んだ歌に仕上げている。

社会的立場をぬきにした「自分」の感情はほとんど表現されていない。Mani Matter の歌は速いスピードと単調なメロディー、そしてちょっと間抜けで不器用な男を通して感情を表現している。



Kurt Marti

1921－2017

プロテスタント系の牧師

- 若い牧師として Bern 州の様々な地域の教会で、村民の悩みと喜びに接する機会が多かった
- そして、1961－1983 Bern, Nydegg 教会の牧師として活躍

人間性、命と死、宗教についての考え方

Marti はプロテスタント系の基本的価値観を認めてはいるものの、多くのキリスト教牧師と違い、確実な真実が存在しないと考え、自分の努力と誠実さがなにより大切だと強調。振り回せられないように抵抗と対抗、ときには怒りも必要だと考えた。人間愛や平等を脅かすものをたえず見つめながら、謙虚に責任を果たすのが Marti の姿勢。

「自分の優越」を強調した当時のスイス軍隊の幹部を強く批判。そのため、Bern 大学の教授選で落選した。

「神（天主）」や宗教についての Marti 牧師の考え方

- あの世のことは全く分からない。信じるのみ
- 自分が死んだ後のことは、神しか分からない

Emmental の宗教観

Meieli (メイエリ) (メイヤちゃん) (直訳)

I (K.W.Dähler, Pfarrer in Langnau) gseh's no vor mir, das zarte Meitschi, wo Tag für Tag ufe Friedhof zu dene beide Greber pilgeret isch, für dert sys ganze Eländ i Träne ufzlöse. Es isch guet zwöi Jahr här, da hei mir Meielis Müeti zum Grab begleitet. Amene schöne Meietag. Es dunkt mi geng bsunders schwär, a nes Grab müesse z trätte, we die ganzi Schöpfig alli ihre Herrlechkeite vor eim usbreitet und dVögeli sich mit Lieder nid chönne gnue tue.

私 (K.W. デーラー、Langnau の牧師) には今でも繊細なあの少女の姿が目の前に見えるようだ。来る日も来る日も二つの墓を参っていたあの子。耐え難い悲しみを涙に託すために。

中略

あれはもう 2 年以上前のことだ。メイヤちゃんの母親 (の亡骸) に付き添って、お墓に向かったのは。五月晴れの日だった。それは私には特に辛いことである – (天主の) 創造して下さった素晴らしい大自然が目の前に広がり、小鳥の歌が響き渡る中、墓に続く道を進んでいく (= 葬式を行うこと) ことは。

Ja, i cha mi nid erinnere, dass ig einisch mit Meieli hätt müesse balge. Es het eim z liebta, was es eim het chönne a den Ouge abläse – und wie isch es a Vattere und mir ghanget!

Der Vatter, e rächtschaffene, eifache Ma, isch tagsüber nid da gsi. Aer het z'Chonolfinge gschafft. I der Zwüschezyt het deheime mängs müesse bsorget wärde: Es sy zwöi Chueli und es Gushti im Stall gestande, ganz abgseh vo de Söili, wo im hindere Stall grochlet hei, und de Hühnere, wo ihres regelmässige Frässe müesse ha. Dass das pünktlech gescheht, isch Müetis Chummer gsy: Der Stall usemischte, der Schorrgrave putze, Fueter inegäh, dChueli suber halte und mälche. Meieli het underdesse das gmacht, wo im Hus isch nötig gsi: Bette, wüsche, ds Zmorge übertue und der Tisch decke.

中略

そう、メイヤちゃんと口喧嘩したことなど一度たりともなかったと思う。人の目を見て、その人

が欲していることを誠実にしてくれる子だった。父親も私も彼女にとって、どんなに大切な存在だったことか！

中略

父親は誠実で、素朴な人だった。Konolfingen で働いていたので、昼間に家にいることはなかった。彼が不在の間、家ではしなければならないことが山ほどあった。牛小屋には牛が 2 頭に子牛が 1 頭いたし、その後ろの小屋にはいつもブーブー鳴いている豚や、時間通りに餌を必要とする鶏もいた。(これらの仕事を)きちんと遂行することは、母さんの仕事だった。牛小屋の清掃、牛の肥溜めの掃除、餌やり、牛を絶えずきれいにしたり、乳を搾ったり。その間、メイヤちゃんは家の中のやるべきことをやっていた。ベッドを直し、部屋を掃き、朝食の支度をし、食卓の準備をした。

By Müeti sy d Schmäärze wieder cho, und scho zäche Tag speter het Mueter Habegger d Ouge zueta. Es halbs Jahr speter isch der Vatter underwägs mit dem Velo verunglückt, u vo der schwäre Hirnerschütterig het är sech nümmer erholt.

Was mi jetz am meischte beschäftigt het, isch der Zuestand vom verweiste Meieli gsy. Won i i dsHus cho bin, für em Meieli mys Byleid uszdrücke, het's abgwehrt: Vatter chunnt scho wieder zue sech, luegit nume". Da isch öpper, wo haderet mit em Schicksal und mit ere ysige Entschlosseheit ds Unabänderleche wott rückgängig mache.

母さんの痛みがまた激しくなった。そして、その 10 日後、Habegger さんちのお母さんは目を閉じた。その半年後、お父さんが自転車事故で重度の脳震盪を起こし、二度と回復しなかった。

中略

私はその時一番気がかりだったのは、孤児になったメイヤちゃんのことだった。メイヤちゃんにお悔みを言おうと家に入っていったが、彼女は「父さんはまた目を開けます！見ていてください」と言って、(私を) 追い返した。そこには、運命を恨み、変えられないことを頑なに変えようとしている人間がいた。

中略

Meieli isch uf e sonderbare Gedanke cho, was em Vatter fähli, syg nume Körperwermi, und die chönn und wöll es ihm gäh. Sy Chummer het ihns fasch Tag für Tag ufe Friedhof gfuehrt, won es sech syne lieben Eltere am neechste gfuehlt het. Und wie schön sy die beide Greber pflegt worde! E Teerose isch by Müeti gstande, wil äs die so

apartig gärn gha heig. By Vatters Grab het a dunkelroti Rose blüiht, wo wunderbar duftet het.

メイヤちゃんは奇妙なことを考えた。父さんに足りないのは体温だけだ、そして、体温なら自分が与えられるじゃないかと。心痛のあまり、ほとんど毎日お墓の所へ行かないではいられなかった。そこは、愛する両親を一番近くに感じられる場所だった。二つの墓のなんと手入れの行き届いていたことか！母さんの墓には、母さんの大好きだった薄いピンクのバラが、父さんの墓には、それはいい香りのする深紅のバラが咲いていた。

Plötzlich steit ds Meieli vor mir und strahlet über ds ganze Gsicht. Du hets mer das Wunder erzellt, wo äs die letschti Nacht het dörfen erläbe. Dänket, i muess nümme geng ufe Friedhof! Und du erzellt es, was äs für ne wunderbare Troum gha heig. Der Vatter syg zun ihm cho und heig ihm gseit, äs mein's ja so guet, aber äs bruuchi nümme so flyssig ufe Friedhof z choo. Aer heig jitz ganz anderi, ganz nöi Ufgabe z erfülle, und jedesmal, wenn äs so truurig bi Müeti und sym Grab plääri, zieh ihn das abe. Aer syg ja nümme dert und heig dert nüt meh z sueche. Aes syg ihm am neechschte, wenn es liebi Gedanke zu ihm ufe schicki und für syni Eltere bätti. Und das chönn äs ja o deheime mache.

Gäll, sägen i zum Abschied, wenn du jitz frei worde bisch vo däm Zwang, geng ufe Friedhof z loufe, so überleg dir, zu was der lieb Gott dir die freiji Zyt schänkt. Du channsch de grad einisch merke, zu was di Gott cha bruuche. De wirsch du es rychs, gsägnets Läbe dörfe ha.

(ある日) 突然、メイヤちゃんが私のところに現れた。顔全体を幸福に輝かせて。そして、昨夜彼女が体験できた奇跡について話し出す。「すごいでしょ！私、もうそんなにお墓参りしなくてもよくなったんです！」そして、奇跡のような夢について語ってくれる。父親が彼女の前に現れて言ったという。「お前は本当に優しくていい子だけれど、そんなにしょっちゅうお墓に来なくていいんだよ。(私には) これからは全然違う、全く新しい任務が待っているんだ。毎回そう悲しそうに母さんと自分(父)の墓で泣いているのを見ると、自分の気持ちが重くなる。自分にはそこにはいないのだから、もう。ここにはもう用がない。愛しい想いを天に送り、両親のことを祈ってさえくれば、(メイヤは父の)一番近くにいるよ。それはうちででもできるだろう。」(と、夢の中の父が言った。)

中略

(メイヤちゃんとの) 別れの言葉に(私は言う)「そうだね。もししょっちゅうお墓に通わなけ

ればいけないという強迫観念から解放されたなら、考えてみなさい。天主は何のために君にその分の時間を与えて下さったのかを。そうすれば、天主が何に君をお使いになられるのかに気が付くだろう。そして、充実した恵まれた人生を送らせていただけるだろう。」

Gekürzte Fassung aus Karl Walter Dähler: Ou das het's ggä
Licorne Verlag Bern, 1997, S.33-42

Mit herzlichem Dank an Frau Nagisa Wälti für Anregungen und Hilfe bei der
Uebersetzung